鬼時

―「蘇小小」補遺―

一

「艶麗によって人を動かし、詩文によって賞され、節操によって名あり、歌声抜群であるなどのもの数十人を挙げることができ、亜みの才子・詩人は多才多芸の彼女たちに圧倒された」と李樹青氏がいったように（前稿の「蘇小小」参照）、唐代の妓女にはすぐれた人が多い。詩についていえば、『全唐詩』は、薛濤・魚玄機の作に各一巻をあて、別に第八百二巻を「妓女」の作でうずめ、さらに、他の巻にも散見する。

さて、「妓女」の最初の作者は関盼々。大意次のように説明し、四首と一連の句を載せる

関盼々は、徐州の妓である。張建封がてもとに置いた。張の死後、彭城の燕子楼に独居して十余年たった。白居易が詩を贈り「死すべきものを」と諷刺した。盼々はその詩をうけとり、泣いていう「わたしは死ねなかったのではない。ご主人さまに、殉死した妾がいたとあっては、ご名誉が傷つきはせぬかと恐れたのです」そこで白に返す詩を作り、十日ばかり絶食してみまかった。

燕子楼三首

楼上茂灯伴暁霜　　楼上の消えのこる灯にあかつきの霜添うて

独眠人起合歓牀　　あのかたと共にした床にひとり目ざめる
相思一夜情多少　　恋いしたうひとよさのおもいのたけは（情、一作知）
地角天涯不是長　　地のきわみ天のはてでも及ばぬでしょう（不、一作未）

北邙松柏鎖愁煙　　北邙山の松の木はかなしみの霧にとざされ
燕子楼中思悄然　　燕子楼にうちこもりおもいやつれる
自埋剣履歌塵散　　あのかたの剣うずめてわたくしの歌声はやみ
紅袖香銷一十年　　はや十年　くれないの袖の香りも消えて（袖、一作褪。一、一作已）

適看鴻雁岳陽廻　　ふとみれば南のくにから北へかえる雁のむれ
又覩玄禽逼社来　　春の祭がちかづいてまたやってきた燕たち
瑤瑟玉簫無意緒　　けれども　琴も簫の笛も　もう用はない
任従蛛網任従灰　　蜘蛛の巣よ閉すがいい　塵ほこり覆うがいい

和白公詩　　白どのに
自守空楼斂恨眉　　ひとけのない家をまもって悲しみをこらえていると

形同春後牡丹枝　すがたはおなじに見えるでしょう　春去った後の牡丹の枝に
舎人不会人深意　あなたには人の気持の底などはおわかりにならなくて
訝道泉台不去随　あやしんでお問いになった「なぜ夜見路までついてゆかぬ」と

句（臨歿口吟）　句（臨終に口ずさんだ）
児童不識沖天物　こどもには天をもつき動かす物のことなど分らない
漫把青泥汚雪毫　泥をつかんで真白な筆をよごした

説明にみえる張建封（七三五ー八〇〇）は、少年のころから文章弁論に長じ、代宗の代（七六二ー七七九）に、蘇・常両州の間（いまの江蘇省）に起った反乱を弁論によっておさめたことがあり、徳宗の代（七七九ー八〇五）に李希烈の乱を平定した功により徐・泗・濠三州の節度使に任ぜられ、のち検校尚書右僕射を加えられ、七九七年入朝したとき、悪政の数々を直言した。一八〇〇年、病気で政務がとれないので、代りを求め、代りの者が来ないうちにみまかった。司徒を冊贈された。

ところで、関氏の主は、張建封ではなく、その子の張愔だとする説がある。

張愔（？ー八〇六）は、父の功により（すなわち文官試験を通ることなく）官界に入り虢州の参軍事となった。建封がなくなったときその補佐の鄭通誠が一時的に代理し、建封のあとがまをねらったが、部下の軍隊が騒ぐこ

とを恐れ、他州の軍隊を引きいれ、その援けによって事を進めようとした。部下の軍隊はこれに怒り、通誠を殺し、張愔を留後（節度使代理）に任ずるよう朝廷に請うた。建封の子とはいえ従八品の人を、従二品の職の代理にするわけにはゆかぬ。はねつけると、愔を擁して、天子の命じた後任を迎えない。鎮定に向った官軍はしばしば敗退する。やむなく、愔を驍衛将軍・徐州刺史・留後とした。のち武寧軍節度使に上げ、八〇六年、病のため代りを求めたので、愔を工部尚書として召した。代りの者との引継もこのたびはうまくゆき、愔は都に向け出発したが、州境を越える前になくなった。尚書右僕射を贈られた。

二

楽天・白居易（七七二―八四六）の作で関氏にかかわるものは「故張僕射の諸妓に感ず」（縮印本四部叢刊の『白氏文集』巻十三。以下、白氏の作はこの本に拠る）と「燕子楼三首并びに序」（巻十五）である。

感故張僕射諸妓

黄金不惜買蛾眉　眉美しい女を買うのに金を惜しまず
擇得如花三四枝　花のような三、四人を選りすぐった
歌舞教成心力尽　歌舞の名手に仕立てるべく心を尽したが

一朝身去不相隨　　いったん身まかれば　つき随うものはいない

燕子楼三首并序

徐州故張尚書有愛妓曰盼々、善歌舞雅多風態、予為校書郎時、遊徐泗間、張尚書宴予、酒酣、出盼々以佐歡、歡甚、予因贈詩云、醉嬌勝不得、風嫋牡丹花、一歡而去、邈後絶不相聞、迨茲僅一紀矣、昨日司勲員外郎張仲素續之訪予、因吟新詩、有燕子楼三首、詞甚婉麗、詰其由、為盼々作也、續之従事武寧軍累年、頗知盼々始末云、尚書既没、帰葬東洛、而彭城有張氏旧第、第中有小楼名燕子、盼々念旧愛而不嫁、居是楼十余年、幽独塊然、干今尚在、予愛續之新詠、感彭城旧遊、因同其題作三絶句、

徐州のもとの張尚書に盼々（盼は盼と音義同じ）という愛妓があり、歌舞にたくみで、なかなかの風情であった。わたしは校書郎になったとき、徐・泗地方に遊んだ。張尚書はわたしのため宴を設け、酒たけなわとなり盼々を出して興をそえた。たいへん楽しいものとなった。わたしはそこで「酔えばたまらぬ愛嬌の、風になよめく牡丹の花よ」といったような詩を贈り、一歡して去った。そののち便りを絶って、ことしでほとんど十二年。昨日、司勲員外郎の張仲素、字は續之なる人がわたしを訪ね、新作の詩を吟じ。なかに「燕子楼三首」があり、はなはだうるわしい。問いただすと盼々のために作ったのだという。續之は数年、武寧軍の属官をしていて盼々の消息にかなりくわしく、その話では、尚書がなくなり、洛陽に帰葬したのちも、彭城には張氏の旧宅があり、その中に「燕子」と名づける小楼がある。盼々は旧主の愛顧を念い他に嫁がず、

この楼に住んで十余年。ぽつんとひとりっきりで、今もやはりいます、とのこと。わたしは緌之の新詠を愛し、彭城の旧遊に感じ、そこで同じ題で三絶句を作った。

満窓明月満簾霜　窓いっぱいの月あかり　簾いっぱいの霜
被冷灯残払臥牀　しとね冷え　灯は消えぎえに　寝床をはらう
燕子楼中霜月夜　燕子楼に霜おりて月あかき夜は
秋来只為一人長　秋さればただひとりのために長いこと

釧鐶羅衿色似煙　宝玉ちりばめし舞衣　狭霧のようなその色
幾廻欲著即潸然　幾たびか着ようとしては涙こぼれる
自従不舞霓裳曲　霓裳羽衣の曲を舞わなくなってからというもの
畳在空箱十一年　むなしく箱に畳みこんで　十一年

今春有客洛陽廻　この春　洛陽からかえった客が
曾到尚書墓上来　尚書のお墓に参ってきた
見説白楊堪作柱　墓のポプラが柱にできる程だった由

争教紅粉不成灰　　紅おしろいをどうして灰にさせないのか

白氏の序を読めば、白氏は関氏の「燕子楼」ではなく、張氏の同題の作に唱和したことになる。ところが白氏の作は、関氏のと韻字が全く同じである。また、白氏の「感故張僕射諸妓」と関氏の「和白公詩」も韻字は全く同じである。これはどういうことなのだろうか。

そこで『全唐詩』を見ると、巻三百六十七はその作にあててあり、「張仲素、字は絵之、河間の人。憲宗の時（八〇六－八二〇）翰林学士となり、のち中書舎人に終る」と説明し、三十八首を収め、最後の三首が「燕子楼」で、関氏の作と同じ（第二首第二句の「楼中」が張氏のは「楼人」とする）で「一に関盼々の詩となす」と注する。わたしが初めに関氏の作として掲げたものは、張氏の作であり、白氏はその作に唱和したので、張氏の詩が一部の人によって関氏の作と誤り伝えた、ということなのだろうか。

白氏についての研究は多いが、関氏とかかわる問題にふれるものはあまりないようである。そんな情況の中で南宮搏「燕子楼人事考述」（『東方雑誌』復刊四・一）を見出し得たことはうれしい。次節で紹介しつつ、わたしの考えを展開してゆきたい。

三

南宮氏はまず「ある人」の次の説を引く。

「白居易は貞元十九（八〇三）年（書判）抜萃科に及第、二十年 校書郎を授けられ、元和元（八〇六）年（校書郎）をやめた。また居易の燕子楼詩序に、わたしが郎であったとき雅（徐）泗の間に遊び、張尚書がわたしのため宴をひらき……、という。その時期は貞元二十年以後に当る。建封は官は司空で貞元十六年になくなり、その子の愔が留後となり官は尚書に上った。だから居易のいう尚書が愔であることがわかる」

これに対し、氏は、居易の「校書郎のとき」というのは記憶の誤りで、その時期に彼が徐州に行った形跡はなく、徐州で張氏の宴を受けたのは貞元十六（八〇〇）年二月、進士科に及第したのち建封の死ぬ六月までとする。従って白氏が関氏に逢ったのはその年の春で、校書郎のときではない、とする。また、関氏は張愔の妾でなく、建封の妾だった、とする。この説は信ずべきものとわたしは考える。既に備わった南宮氏の考証を繰返すことはやめ、一つ補っておく。

白氏の「二良を哀しむ文、ならびに序」は、八〇〇年、徐州の乱後まもなく執筆したものと察せられるが、その序にいう。

丞相隴西公（董晉）が汴州の節度使となったとき軍司馬御史大夫陸長源が補佐して二年、軍用安定した。

司空南陽公（張建封）が徐州の節度使となったとき副使祠部員外郎鄭通誠が補佐して三年、民用安定した。

（貞元）十五年、隴西公がなくなってまもなく軍が反乱し、大夫は剛直のため禍にあった。十六年夏、南陽公がなくなり、翌日事件発生、員外は非常の行動によって害をうけた。惜しいかな、大夫は人望の人、員外

は国の選良である。……いつかきっと天子の手足となり、王家を守る人となろうと、識者は批評していたのに……。

「識者」とはいっても、これが白氏の批評であること、いうまでもない。この文は陸・鄭の死をいたむ文だ。鄭に対する新・旧唐書の書き方は白氏ほど好意的ではない。どちらが真実かは、ここにはかかわらぬ。白氏の判断に従って鄭が善良の人として、その人を死に追いやったのは徐州の軍隊であり、その軍隊に推戴されたのが張愔である。「二良を哀しむ文」を書いて数年にしかならぬ八〇三―八〇六年の間に、のこのこと当の張愔を訪ね、もてなしの宴を受ける、といったことがありうるだろうか。白氏の言論と行動は、前と後ではずいぶん変る。わたしには非難する資格はないが、事実としてそうなのだ。けれども三十歳代前半のかれがそのように彪変したとは考えにくい。白氏が宴をうけた張氏は、やはり建封であって、その子ではあるまい。従って、盼々もまた建封の愛妓だったのであろう。

南宮氏はこのあと、白氏の「燕子楼」の作時を、元和六（八一一）年あるいは七年と推定し、白氏の「故張僕射の諸妓に感ず」る詩は白氏の作と見るに疑いがあること、関氏がこれを読んで返した「白公に和す」る詩とともに後世の好事家の創作で、関氏の絶食死も信ぜられないこと、を論証する。わたしは、この南宮論文の後半に対しては種々の疑問をもつ。それを次節以降に述べる。

四

白氏は序文に「昨日来訪」という。昨日のことに誤りはなく訪客張仲素の官職も確かであろう。仲素は元和六年、司勲員外郎に調ぜられ、到職の日は詳かでないが、白氏は時に四十一歳、母の喪に服して長安郊外の渭水のほとりに退居していた。元和六年あるいは七年は、張建封の死んだ八〇〇年からは、序文にいうように「ほとんど十二年」。これが南宮氏が「燕子楼」の作時を定める根拠である。仲素の司勲員外郎になった年は、何に拠ったのか記さぬ。

張仲素につき、旧・新『唐書』には伝を設けない。元の辛文房の『唐才子伝』巻五に伝がある。

仲素、字は絵之、貞元十四〈七九八〉年……の進士、……また博学宏辞科に及第し、始めて武康軍従事に任ぜられた。貞元二十〈八〇四〉年、司勲員外郎に遷り、翰林学士に除せられた。……その後、中書舎人を拝した。仲素は文章をよくし法度は厳確だ。魏の文帝が「文は意をもって主とし、気をもって補佐とし、詞をもって護衛とする」というが、これが彼の文風をいいあてている。一々の詞は不充分だが意はまず備わっている。詩を善くし警句が多い。なかにも楽府に精通し、しばしば作曲され、古人の思いつかなかったものがある。集一巻と『賦枢』三巻が今に伝存する。

『才子伝』は、現存しない資料を多く保存して貴重だが、誤りも少くはない。引いた文中「魏の文帝」の語とするものは、実は杜牧が「荘充に答える書」中の語を少し変形したもの。詩に対する批評も信用しうるともいえぬ。だから他の事項についても、うのみにはできぬ。しかし、とにかく司勲員外郎になった年については南宮氏のとは違う一つの説だ。

清の労格・趙鉞『唐尚書省郎官石柱題名考』巻五、司封の部に張仲素がみえ、仲素が安南都護張応の子であること、元和七年、吏部に考判官を復置したとき屯田員外郎の仲素らをあてたこと、元和十一年、仲素を礼部郎中から翰林学士に充当したこと、十三年、司封郎中知制誥を加えたこと、十四年、中書舎人に遷り、十四年になくなって礼部侍郎を贈られたこと、などをいずれも典拠を示して述べる。その典拠の多くはわたしには見難いものだからこの目で確かめられぬが、『続修四庫全書提要』にいうように「致力・徴書・用心に勤苦した」書だからまずは信じてよいであろう。これでみると元和七年、吏部に移ったとき、員外から郎中に上ったのではないだろうか。『才子伝』のいう貞元二十（八〇四）年から、元和七（八一二）年まで、八年間も員外郎であったのは少し長い様な気はするが、その間に属する部はかわり品第は上ったのであろう。司勲にいたのは、『才子伝』に誤りがなければ、八〇四－八一二の間の幾年かであった。なお、時期は定かでないが、元和八、九年のころ、仲素が翰林学士に充てられようとしたとき、清潔剛直で知られた同列の韋貫之が「行動が正しくない者を内庭に在らせてはいけない」と阻んだ（旧唐書・韋伝）ことは注目すべきであろう。

さて、白氏は、八〇六年校書郎をやめ、前の年から交遊しだした元慎と共に才識兼茂明於体用科（上級試験）を受け、ともに登第し、白氏は四月末に県尉、八〇七年、翰林学士、八〇八年、左拾遺（学士のまま）、この年結婚、八〇九年、新楽府を作り、八一〇年四月、京兆府戸曹参軍（学士のまま）、八一一年四月、母の死により官をやめ、以後三年の喪に服する。

南宮氏は、白氏が張氏の訪問をうけたのはこの服喪の前後と見るようである。白氏は服喪中も作詩をやめず、

「賞花」「新井」の詩によって物議をかもすことになる。物議は強いてケチをつけた趣のものだが、服喪中の人を訪ねて、主に対して己の新詩を吟じ、談が歌妓に及ぶことは、竹林の隠士ならいざしらず、礼教にうるさがった唐代の官僚の張氏の行動としては考え難く、白氏が歌妓にちなむ詩に次韻唱和したこともありうべきこととは考えられぬ。服喪の前の一、二年、すなわち元和四（八〇九）年から六（八一一）年三月末まで、とみて、例の序の「ほとんど十二年（一紀）という概数とさしさわりはない。この間、白氏は前記のようにずっと翰林学士で諷諭詩の製作に活動的であった。白氏の「燕子楼詩」の作時をこの間に定めてよいだろう。なお、あとさきになったが、仲素の字の「繢之」を他の本が「絵之」とする。繢・絵は異体の同字である。

五

白氏の「燕子楼詩序」（以下「序」と簡称する）は、信ずる立場で読めばそれまでだが、いったん不審をいだいて読み直すといろいろ問題が出て来る。

第一、いわゆる張氏の「新詠」の「燕子楼」詩が、果して張氏の作か。

「序」によると、昨日、張氏が白氏を訪ね、新詩を吟じた。吟じた中に「燕子楼三首」があり、はなはだうるわしい。問いただすと盼々のために作ったのだという。

ところで「盼々のために作った」の原文「為盼々作也」は、「盼々の作なのです」とも読めないことはない。

「為」字は去声に発音すれば「ために」だが、平声に発音すれば「です」である。中国人ははっきり区別して発音するのが常である。けれども、あいまいな言い方をするときには発音もあいまいになる。

話が少し横道にそれるが、宋代の女詞人李清照が「醉花陰」という詞を作ると、あまりうまいので夫の金石学者趙明誠が、負けじとばかりに五十首ほど作り、中に妻の作を交えて友に見せたら、何度も読んだ上で、これがいいと指したのが妻の作だった、という話が伝わっている。夫だから苦笑して済み、美談となった。詩に命を削った国の、時代の知識人は秀句佳吟に対し執著恋慕するもので、恋着した句をおれによこせとせがみ、断られたため、むすめの夫を殺した詩人の逸話もある。張氏がはじめから関氏の作を奪うつもりはなくとも、吟じた幾十首のうち関氏の作に、白氏が強烈な興味を示し、それは？と問いつめられたら「関氏の作だ」といったつもりが「関氏のために作った」という風にあいまいな答え方になっていた、ということは、ありがちである。

あるいは、張氏ははっきり「関氏の作だ」といったかもしれぬ。しかし、その作に強く動かれた白氏が次韻唱和の詩を作ってしまい、歌妓の作に唱和するのは都合がわるいので、関氏の作を張氏のものとしてしまったのかもしれぬ。「序」の後の方の張氏の「新詠」ということばも、新詩と同じ意味だが、張氏の吟詠した（関氏の）詩、とも読めば読める。そういう言いわけのきく書きかたである。

そう思って読めば、なかに「燕氏楼三首」があり、はなはだうるわしい、も他の作とは隔絶してうるわしい、ともとれる。いま『全唐詩』に収める数十首しか張氏に詩作品がなかったとは考えられぬが、その作は、巧みには違いないが、過去の名人の使い古したことばを小器用に組合わせた作で、情感がこもって人をうつのは「燕子

楼三首」だけだ。白氏ほどの詩人にその違いが分らないはずがない。

白氏には、そして他の詩人にも、妓女を歌い、妓女に与えた詩はあるが、妓女の詩に唱和する作はないようである。恐らく、唱和には、相手を同等とする身分観のようなものがあって、妓女は避けられたのであろう。もっとも、白氏も薛濤とは唱和している。彼女は妓女だったことがある。しかし、唱和の時は、彼女はすでにかなりの老齢で、さらに「詩人」として世の尊敬を得ていた。（もっとも、妓女でない女性との唱和も、唐代の詩人にはほとんどない。詩を作る女性が極めて少なかったからであろうし、また当時の男性の女性観を反映しているのであろう）

ところで、白氏は、なぜ張氏にかこつけてまで関氏の作に唱和したくなったのか。

「序」にいうように「彭城の旧遊に感じた」からに違いない。

その「旧遊」の主、張建封は、『旧唐書』によれば、事がおこればみずから処理にあたった。寛厚で人の過誤をも容れたが、しかし法律はよく調べ、法を曲げて恩を売るということはしない。事にあたっての言葉は忠実正義で感動にみち、人はみな畏悦した。七九七年入朝したとき、当時誰もがはばかって言わなかった宮市の害を天子に直言した。宮市とは、天子の近臣が日用品などを買い占め、市価の数倍ないし数十倍で人民に売りつけていたことである。建封の彭城にいた十年の間、軍も州もよく治った。またかれはすぐれた人を礼遇し人々に対して謙遜であったから、天下の名士は風になびくようにかれを訪問した。韓愈のような文豪もかれの下僚であった。

そのような建封が、進士科に及第したばかりの白氏をもていねいに待遇したことは間違いない。白氏は二十九

歳、建封は六十六歳だった。貧寒の家に育って苦学力行してきた白氏がそこでうけた待遇は、建封にとっては誰に対しても同じようにするものであったとしても、白氏には過度の恩遇と感ぜられたろう。その宴は、おそらく白氏が生れて初めて味わった華麗豪奢であった。演奏された音楽の最後は霓裳羽衣の曲であり、舞妓のヒロインが関氏であった。関氏の年齢はわからぬが、たぶん二十歳前後。「酔えばたまらぬ愛嬌の、風になよめく牡丹の花よ」と歌った白氏の目には、楊貴妃が生きて前に立つように見えたのであろう。

「序」はその短い文中に「歓」字を三たび用いる。いかに白氏が有頂天になったかを伺わせる。ことに最後の「一歓」は、さまざまに解釈しうるが、極端には、枕席を共にすることを含みうる。

当時の歌妓は、身分としては奴隷として売買され、主はこれをどのようにも処分し得て、場合によっては人に贈与した。人の歌妓に恋して強請した例もある。いずれも白氏と同時のこととして記録される。建封がそのようなことをしたとは、まず考えられぬが、次のような情況を仮設することはできる。

建封は六十六歳、白氏の来訪時には出て接待はしたが、すでに病身であった。歌妓のうち人品の最もすぐれた関氏を、愛するだけに、おのれの身後に来るべき零落をさせないため、その相手となるべき青年を求めていた。白氏の才幹と関氏への執心を見てとって、もし面倒をみてやってくれるなら…と許しの意志を示した。

これはもとより仮設である。ただ、わたしの妄想ではなく、当時に仮設を許す条件があり、何よりも、白氏の「序」に想像を誘う熱気がある。

もっとも「一歓」の文字は一本には「越朝」とするらしい。次の朝、というほどの意であろうが見なれぬこと

ばである。

白氏が訪ねたのは春、そして夏の末には建封はなくなっている。「序」中の張仲素のことばに「盼々は旧主の愛顧を念い他に嫁がず」とあるところからすれば、他の歌妓はそれぞれ他に嫁いだのであろう。売り払わずに嫁がせることを、建封が死ぬ前にはかっておいたのだといえないか。そのように広く深い愛情に感じたればこそ、関氏はその人の名誉の傷つくことを恐れたのであろう。

関氏の「燕子楼三首」には、そのような篤い哀傷が流露する。白氏のは、一読するとほとんど同じ趣意だが、肝心のところで大きく違う。

関氏は、琴も笛ももう用はない、といっているのだ。己のために磨いた技と思っていた舞いが、主に死なれてみると、その人のためにこそ骨身惜しまなかったことに気づかせられる。おのれの舞いにこめた心は、ただ張建封のみが理解し黙識した。

白氏のは、舞衣を「幾たびか着ようとして」といい、「空しく箱に畳みこんで」という。歌舞の妓だから主が死んでも舞いたいだろうとの先入観に立つ句である。舞いたい心を前提とすればこそ舞衣を畳みこんだものが、「空箱」と表現され得る。

関氏は「はや十年　くれないの袖の香りも消えて」という。まして、紅・白粉は主の死とともに灰になった。白氏は「紅おしろいをどうして灰にさせないのか」という。こんなに悲しい思いをする位なら死んでしまった方がましだのにどうして運命は私を死なせてくれないのか。白氏はそう解釈することで関氏に同情を示したつもり

なのかもしれぬ。しかし関氏の内面の深い悲しみには全く触れていない。かれにはおのれの旧遊に対する感傷はあるが、その「旧遊」を実現してくれた主の側の手厚い用意、そのような用意を生むこまやかな精神をくみとるほどの神経はない。

白氏ほどくりかえし霓裳羽衣の曲を歌った人はない。そのかれに「霓裳羽衣の歌、微之に和す」（巻五十一）がある。「わたしは昔元和のころ憲宗皇帝に侍し、昭陽殿での内宴にお供した。千歌百舞と数えきれぬが、中でも最も霓裳舞を愛した。舞うときは寒食の節句で春風そよぐ天、……当時見ながら目も心も驚き、凝視し耳かたむけなお足らぬ思いがした。……」と九十句に及ぶ長篇に、この曲に対する愛情をのべ、銭唐に勤務したとき、歌妓に教えて演奏させたこと、蘇州に転勤して以来それが見られない。聞けばあなたの部内には楽人が多い由。あの曲を知る者はいないだろうか。美しい歌妓がいないというが、とにかくあの曲を教えてもらいたい。と、元稹に依頼している。

白氏がこの曲を見聞した最初は、たぶん張建封の宴においてである。内宴での舞楽の描写は、ほとんど「琵琶行」に匹敵する。おそらくかれを感動させたのは眼前の舞に関氏の舞を重ねた、うつつとも幻ともつかぬものだったのであろう。

六

道士が玄宗皇帝を案内して月宮に行った。仙女数百が舞った。曲名を問うと「霓裳羽衣」と答えた。帝はその曲調を暗記して帰った。たまたま西涼節度使からバラモン曲を進めてきた。声調が符合するので、月中で見た舞の振付をして「霓裳羽衣」と名づけた。そんな伝説がある。玄宗と楊貴妃の愛はこの曲をテーマミュジックとして展開する。白氏の名声を広大にした「長恨歌」は張建封の宴での陶酔がなければ生れなかったかもしれぬ。六十六歳の建封と二十歳の関氏との愛は、玄宗と貴妃との愛とは違っただろうが、白氏にテーマを与えるほどの表面的相似は認められる。白氏にとっての甘美な悲劇が完成するためには、ヒロインが生きていることは面白くない。白氏の美学が無意識のうちに、ヒロインの死を予想していたかもしれぬ。

「故張僕射の諸妓に感ず」る詩は、初めて読んだとき、ひどい詩だな、と思った。「李夫人」の「人は木石に非ず皆情あり、如かず傾城の色に遇はざるに」の句に至ったとき、なるほどと思った。白氏の批評性はここでは一貫している。ある種のジャーナリズムであって、多数の意見を代表する。多数の意見はゆれ動くから白氏の意見もゆれ動くだろうが、多数の意見の代表であるという点では動かないから、いつでも多数の支持をうける。

わたしの読むものはわずかだが、以後、白氏を論ずる文を読んで、この詩に不審を示すものに逢わなかった。南宮氏の論文は大いに多とするに足る。ただ氏は、これを他人の偽作とし、五つの理由をあげる。

1　関氏の白氏に返した詩に、己れが主に従って死ぬ意志が表明されていない。「旬日食わずして死す」は後人の記したことばで、拠りがたい。

2　白氏の一首は、白氏の作とするのに問題がある。白氏の集は流伝の過程で混乱し、他人の作が混入した形跡

があるからである。

3　白氏は人に従死を強いるような人柄ではない。

4　関氏の白氏に返した詩に「舎人」の語でよんでいる。白氏が中書舎人となったのは長慶元（八二一）年、五十歳、「燕子楼」を作ったのちざっと九年、張愔の死後十五年で、いずれにしても時間が合わぬ。

5　「故張僕射の諸妓に感ず」と関氏の返しを、後人の偽造でないとするなら、前の詩の作者と、関氏の作中の「舎人」は張仲素であろう。仲素は建封の死後、徐州に長くいて関氏のことも、ただ一日会っただけの白氏よりずっとよく知っていた。また仲素が中書舎人となったのは白氏よりずっと早いのだから時間的にも合う。

以上の五条からして「故張僕射の諸妓に感ず」る詩は白氏の作ではなく、関氏の返詩とともに後人の偽托である可能性が強い、とし、最後に次のように付加える。

関氏の絶食死は単証があるだけで、実は信じ難い。常識で考えて、一個の女人が寡居十余年の後には、従死しようという激烈な意念は必ず消失しているもので、一首の詩で諷刺されて死んでしまうなどは、ドラマティックすぎて、事実ではなかろう。

これに対しては次にように反論することができる。

1　人は「死にます」と広言して死ぬものとは限らない。死のような大事は、事実によってこそ示すものともいえよう。その死の事実を後人が記したからといって、詩そのものを偽作と推定する根拠にはならぬ。

2　白氏の集に混乱があり他人の作がまぎれ入った形跡のあることはすでに先人がいう。しかし特定の作（ここ

では「故張僕射の諸妓に感ず」）を他人の作とするためには、もう少し手続をふまねばならぬ。南宮氏はそれをしていない。

3　白氏が人に従死を強いる人柄でない、ということは「故張僕射諸妓に感ず」の詩を白氏の作でない、と前提した上でのことであろう。「如かず傾城の色に遇はざるに」なる白氏の句をおしつめると、美しい容色をもって生れた女人は、男を愛してはならず、結婚もしてはいけないことになる。つまりは女人としての生存を許されぬことになる。この句の内包する男性としての身勝手、むごさ、に白氏は気づかなかったろうが、このむごさと、「故張僕射の諸妓に感ず」を作るむごさとは共通しており、白氏の友元慎の「鶯鶯伝」を作ったむごさと共通している。

4　関氏の詩にみえる「舎人」の語を「中書舎人」と限定すれば時間的に合わないが、詩中で使用する「舎人」はその限定はうけず、天子の侍従であればよく、広くは貴人の側近まで含みうる。翰林学士であった白氏は、詩中で「舎人」とよばれて不合理ではない。

5　白氏の「序」からみて、張仲素は関氏に充分同情的であり、関氏に同情的な仲素に対してからかう気味が、「序」の文にただよう。それでも「仲素」の「新詠」に唱和した「燕子楼」では、張仲素への遠慮からことばは穏かだが、「故張僕射の諸妓に感ず」こそ白氏の本音の流露したものであろう。

以上からして、南宮氏の疑った両詩は、それぞれ、白氏と関氏の作とみてよいであろう。南宮氏が信じ難いという絶食死は、たしかに「常識」では信じ難いであろうが、常識を超えることが歴史の上でも、また日常われわ